

ひがしの

2月号 東野小学校報 No.12

しゅんぷう もっ ひと せつ
春風を以て人に接し、

しゅうそう もっ みずか つつし
秋霜を以て自ら肅む

佐藤一斎（言志後録 33 条）

春のさわやかで温かいやさしい風のように人に接し、
秋の霜のような凜とした厳しさに己と向き合う。

（NPO法人いわむら一斎塾「おじいちゃんとおぼく」より）

校長 青山龍三

「何をボ - ッとしてんだよ。もそもそ食べてるからそうなるんだよ。お前には何を買ってやってもそういうことばっかだから、お前みたいな馬鹿にはもう何も買ってやらない」

聞くに堪えない 罵声が耳に飛び込んできた。後ろを見ると、25,6歳かと思われる若い母親が、5歳くらいの女の子を叱り飛ばしている。

その女の子の足元には、買ってもらってなめ始めようとしたが誤って落としたであろう、ソフトクリームの中身がべったりくっついてる。女の子は、唇をかみしめながら、上目遣いで母親を睨んでいたが、やおら手に持っていた小さな紙袋を破いて、その落ちたアイスクリームを片付けようとし始めた。すると、また、母親の大声が響いた。



「汚いよ。オマエ馬鹿か。そこにほっとけばいいんだよ。早く来ないとおいていくよ。」

そう言いながら、振り向きもせず、さっさと歩き出してしまった。女の子も仕方なく破った紙をソフトクリームの上において母親を追いかけ走り出した。（聖徳大学 西村佐二教授『人を思いやる言葉の大切さ』より）

寒い日が続いて、ただでも冷たい毎日なのに、心まで冷え込むような話を書いて申し訳ありません。皆さんなら、急いでいるとき子どもが誤ってアイスクリームを落としてしまったらどう声をかけますか。

本校では“願う子どもの姿”の一つに[思いやりの心を育てる]があります。以前にも書きましたが、「人の気持ちを思いやる」ことはたいへん難しいことです。自分以外の人の心を様々な情報から推測することですから、まず思いを汲み取ろうとする気持ちが大切です。

12月のひびきあいの日に公開した道徳の授業で、担任教師が道徳資料を読んでいるときに声が震えていました。資料に感動したものと思いますが、保護者の中にもすすり泣く方がみえました。資料に登場する人物の気持ちが伝わったのです。本校が目指したいのは、自分以外の人の思いをいつもわかろうとする態度です。道徳の授業を中心に子どもたちが人の気持ちを感じることを経験する機会を作っています。学校での生活ばかりでなく、家に帰っても自分以外の人の気持ちを感じて生活してほしいと願っています。



始めに書いた母子ですが、母親は食べたいアイスクリームを落としてしまって悲しい思いをしている子どもの気持ちも、床を汚してしまったことを『しまった。』『どうしよう。』と思う娘の気持ちも、全く汲み取ろうとする態度ではありません。自分の感情だけを娘にぶつけています。この一連の“事件”から娘は何を学ぶでしょう。母子にどのような親子関係が構築できるのでしょうか。この娘は将来どのような子に育つのでしょうか。

「思いやり」のある行動というのは、何も直接人と話したり、何かをしているときだけとは限りません。例えばトイレのスリッパのかかを入り口に向けて脱ぐのも、次にトイレを使用する人に対する思いやりです。自分に厳しくない人に『春風を以て人に接』することは難しいこととなります。

